

「音の遺伝子」の場所性と非-場所性——北海道新冠町レ・コード館を事例に

「ポピュラー音楽」の遍在性=非-場所性
「ミュージアム」の場所性 } 対照

①

②

➤ ポピュラー音楽の定義「大量複製技術以降に出現した商品化指向の音楽の諸様式の総称」(山田 2003 : 19)

①を敷衍し……

「複製性／一回性」この点で、P音楽・映画・マンガなどと、上演文化（演劇・演芸）は弁別される。

「時間芸術／空間芸術」この点で、P音楽・映画などと、マンガ・写真・ポスター・絵画などは弁別される。

「非質料性／質料性」この点で、P音楽と、他の多くのコンテンツ文化とは弁別される²。

「移動性／固定性」この点で、P音楽と映画は弁別される。

↓

これら P 音楽の特性は端的に遍在性を示す。言い換えれば特定の場所の記憶をもたないということになる。これはミュージアムが否応なくもつ「場所性」(知識の集積／展示の構造学、Clane2000=2009) と対立する。

②を敷衍し……

ネット初期(電話回線時代)、デジタル回線を通じた文化作品の流出は P 音楽がもっとも早く問題視された。やがて民間企業の商用目的でのアーカイブ化が充実する (iTunes Store、タワレコ、ツタヤ、着うたなど)。データマイニングの実用、クラウドコンピューティング思想の先取り

どこにでも、どこからでも取り出せる「水のような音楽」(Kusek and Leonhard 2005=2005)

↓

企業による P 音楽のアーカイブ化の充実は、国家や行政、非営利団体による取り纏めを今さら求めない。このことは「アーカイブ」としてのミュージアムを必要としないことを意味する。

むろん著名作家の遺品、楽器、楽譜、音盤などの質料性を伴ったモノを、思い出という場所性に寄り添いつつ展示することは可能だし、それらをテーマとした館は多数あるが、それは——私たちが本物の絵画を当地で鑑賞して絵画体験をすることと同質の——音楽体験に結びつくものではない。(どこで聴いても音源の質には変わりがない)。

➤ P 音楽とミュージアムの関係を考えることは、「場所性とは」「展示とは」³を考えるきっかけとなるのでは？

☆ 本研究会での 2 人の音楽関連報告は、そうした場所性と非-場所性のせめぎ合いを主題化している。

1 二項対立モデルを用いているがこれはあくまでも理念型である。現在のデジタル化された環境では、さまざまなサブカルチャー・表現文化が等しく P 音楽的な諸特性に近づいているといえる。

2 昨今の CD 不況により、パッケージかデジタルかという対比がなされることが多いが、そもそもポピュラー音楽は質料性とは無縁に、電波に乗って(すなわちラジオで)流通していたことを思い出さなくてはならない。

3 「展示」の問題系(モダニズム、ベンヤミン的関心)を主題化したテキストは近年増加している(太田・三木編 2007、川口編 2009)

永井報告→音の展示とポストミュージアム「鳴く虫と郷町~The Songs of Insects」

町の至る所でのイベント（虫の鳴き声）の非-場所性を、町全体の「文脈」と関連づけ場所性を取り戻す。
山崎報告→音風景（サウンド・スケープ）の展示「音戯の郷」

楽器をならし野鳥や周囲の自然音を聴く（非-場所）体験を、コンセプチュアルな体験館（場所）で実現。

☆ フォーラムとしてのミュージアム（Cameron1972、吉田 1999：216、山中報告）

☆ ただし、両者ともP音楽というよりは、サウンドスケープ的な音の展示である。

➤ もうひとつの可能性としてのレ・コード館

北海道新冠町。レコードなどの記録媒体を「音の遺伝子」「思い出の遺伝子」と位置づけ、100万枚のレコードの収集を目標として、広く視聴覚資料と再生装置を収集展示し、視聴などによって公開する施設のほか併設のライブラリーをも有する。資料所蔵状況は、09年7月末現在で765,609枚。また、レ・コード館の近隣には、レコードの形状を模した公園や、レ・コードの湯と名付けた温泉もある。さらに町のいたるところにレコード型ののぼりや看板があり、町全体がオブジェのようである。（別資料参照）



（特徴）

- 1) 館が所有するすべてのレコードを試聴できる。プレミアム盤/通常盤などの区別はしない。しかもそれを、オールホーンスピーカーを備えた「究極のレコードサウンドの再生」部屋で体験できる。（別資料参照）
- 2) 来場者のリクエストはP音楽が多い。寄贈レコードも邦楽P音楽の率が高い。
- 3) ミュージアムには蓄音機やロウ管レコードなどのさまざまな展示品がある。また展示にとどまらず、ガイドに従い、19世紀末~20世紀中盤までの蓄音機の「音」を体験できる。実際にロウ管やSPレコードを竹針や鉄針で聴かせてくれるのである。レ・コード館の正式名称は「聴体験文化交流館」。
- 4) 歴史は浅く（1997年開館）、そもそもの設立は町内の音楽サークル「一枚のレコード」メンバーのアイデアからはじまっている。ふるさと創生基金の時代に実現化した、町おこし策の一環であった。
- 5) 町民ホールや図書館、会議室などが同じ建物内にあり、コンサートの開催の他、修学旅行や学生音楽サークルの受け入れ、カラオケ大会、各種催しや会議などが開かれる町民の集いの場となっている。
- 6) 現在の利用状況は、9割が町内/町外住民の施設利用で、観光客は1割前後。運営は新冠町の教育委員会の直営。学芸員は置いておらず広告費もほぼかけていない。楽曲のリスト入力作業も職員の仕事である。
- 7) であるからこそ、バブル崩壊以降も破綻せずに存続できている。また、使い勝手のよいシンボル施設が町にあることで町民の交流が活性化し、「文化を中核とした町づくり」が行われている。

（新冠町教育委員会職員・吉田綱平さんインタビューより）

これら諸特徴は、——必ずしも意図した結果としてではなく——「音楽の非-場所性」「展示のあり方」を浮き彫りにする。

- ◇ 非-場所性：(1) (2)=等価値化されたアーカイブ、(4)=存立の無根拠性、(6)=非-商用性
- ◇ 場所性：(5) (7)=その場所であることの強い意義。(であるほど、地域共同性のつながりへ)。
- ◇ 展示よりも体験：(1) (3)=正しくマクルーハンの「メディアはメッセージ」の体験。

レコードルームでクラックルノイズ混じりの美音を聴き、ミュージアムで前世紀の蓄音機を当時の音響環境で聴くことは、場所性ではなく時間性に結びついた体験である。メディア (=蓄音機、ロウ管や SP 盤、LP レコードなど) によってまったく異なる音の鳴り響きを体感することは、メディアそのものが時間性に区切られたメッセージを放つことを再認識させてくれる。遍在でもなく均質でもない P 音楽の「音」の姿が、非-場所的で等価値化された場所だからこそ鮮明に蘇る。——「遺伝子」とは、時間的な系脈に他ならないのである。

➤ 追記

私は文化社会学者であるがゆえに、音楽の体験性について今回の議論を組み立てた。しかし、取材をした感触としては、地域とミュージアムというテーマで考えること——すなわち(4)~(7)を前面に出した考察——も、ありえると思えた。私が地域社会学者であったら迷わずそうしていた。それほどレ・コード館の取材は興味深いものであった。時間を割いて取材やインタビューに応じていただいた関係者各位に感謝したい。

➤ 文献

Camron, Duncan, 1972, “The Museum : a Temple or the Forum”, *Journal of World History*, 4(1), p.p.189-202.

Crane, Susan, A., ed., 2000=2009, 伊藤博明監訳『ミュージアムと記憶』ありな書房.

川口幸也編、2009、『展示の政治学』水声社.

Kusek, D. and Leonhard G., 2005=2005, yomoyomo 訳『デジタル音楽の行方』翔泳社.

太田喬夫・三木順子編、2007、『芸術展示の現象学』晃洋書房.

光岡寿郎、2008、「無臭化するインテリアデザイン」(http://artscape.jp/study/note/1198033_1970.html)

山田晴通、2003、「ポピュラー音楽の複雑性」東谷護編著『ポピュラー音楽へのまなざし』勁草書房、3-26 頁.

吉田憲司、1999、『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』岩波書店.